

# 「七高僧④道綽禪師について」

今回お話するのは、七高僧の四番目、第四祖に当たる道綽禪師です。

七高僧の第一祖、第二祖はインドのお方でしたが、第三祖、第四祖、第五祖は中国の祖師です。中国の高僧のお二人目が、道綽禪師です。

道綽禪師は、中国の黄河流域の并州汶水（山西省文水）で、562年にお生まれになりました。第三祖の曇鸞大師が亡くなられて二十年後です。日本への仏教伝来は538年とされますから、道綽禪師がお生まれになられたのは、日本に仏教が伝えられた少し後、聖徳太子とほぼ同じ飛鳥時代のことです。

道綽禪師がご幼少の頃、インドから『大集月蔵経』が中国に伝わります。この経典には、仏教の教えは釈尊が亡くなられた後、時代が下るにもなって正しく伝わらなくなり、やがて仏法が衰退する時がやってくるという、いわゆる「末法」の到来が説かれています。

前回も少し説明しましたが、「正像末の三時説」とは、

- ① 正法の時代：釈尊の正しい教えを正しく行じることによって正しいさとりが得られる、仏滅後500年
- ② 像法の時代：教えはあっても形ばかりの行でさとりが得られない、次の1000年
- ③ 末法の時代：かろうじて教えだけは残っても、行ずる人もさとする人もない次の一万年とされます。

道綽禪師が生まれたのは、末法に入って11年目のことであつたとされています。まさに仏法は衰退に向かいつつあるという、強い危機感が広まっていた時代でした。

道綽禪師は14歳で出家して仏教の学問を志します。ところが574年に北周の武帝が厳しい仏教弾圧の政策を取ったため、寺院は破壊され、仏像や経典は焼き払われ、僧侶や尼僧は殺されたり強制的に還俗させられ、若い道綽禪師も僧侶の身分を奪われます。末法思想もあり、道綽禪師は仏教の衰退が叫ばれた時代に生きたのでした。

中国では「三武一宗の法難」と言われる国家をあげての仏教弾圧が四回あつたことが知られています。

- ① 北魏の太武帝（5世紀・在位423～452）による廃仏一道教を保護する一方で仏教を弾圧（446～452年）
- ② 北周の武帝（6世紀・在位560～578）による廃仏一道教も仏教も弾圧（574～578年）

③ 唐の武宗（9世紀・在位 840～846）による廃仏—道教を保護、仏教と共にマニ教・ゾロアスター教・ネストリウス派キリスト教（景教）も排斥（845～846年頃・会昌の廃仏）

④ 後周の世宗（10世紀・在位 954～959）による廃仏—前三回の廃仏と異なり根本的な廃仏ではなかった（955～959年）

これに文化大革命の時の仏教弾圧も加えて、三武一宗一毛の法難と呼ぶべきだという人もいます。

道綽禪師が体験された法難は第二回目のもので、北周の武帝は儒教によって富国強兵をはかり、仏教も道教も排斥しました。当時 16 歳だった道綽禪師は大きなショックを受けられたことでしょう。

この廃仏は武帝の死とともに終わり、隋の時代になった 578 年に仏教は復興し、道綽禪師も再び出家されました。そして厳しい修行に励まれます。

道綽禪師は、30 歳を過ぎてから山西省太原・開化寺の慧瓚禪師の元で学び、『涅槃経』研究の大家とされます。

『涅槃経』は、人間の本性を徹底して見極める経典で、すべての人に例外なく「仏性」すなわち「仏としての性質」が具わっているという考え（「一切衆生悉有仏性」）が説かれています。

ところが 48 歳のある日、隋の大業 5 年（609 年）、旅の途中で太原から南西へ約 70km のところに玄中寺を参詣された際に、曇鸞大師の功績をたたえた石碑に出逢い、その碑文を読んで大きく感動されて、自力修行の道を捨てて、浄土教に帰依されたといわれます。曇鸞大師が亡くなられてから 70 年ほど後のことでした。

道綽禪師は、この玄中寺におられた学徳の高い曇鸞大師ですら、自力の道をすてて他力によられたことを知って、大きなショックを受けられました。道綽禪師は、真に救われる道は阿弥陀如来の他力によるしかないと確信されたのでした。

以後、道綽禪師は玄中寺に住みつかれ、一日七万遍、お念仏をとこなえられたといわれます。それまではお念仏というと、出家者の自力の念仏である「観想念仏」が主流でしたが、道綽禪師は口でお念仏を称える「称名念仏」をお勧めになりました。

また「浄土三部経」のひとつである『観無量寿経』を二百回以上も人々に講義されたといわれます。

人々に小豆でお念仏の数を数えたり（小豆念仏）、木樨子（ムクロジ科の落葉樹の高木）のタネで数珠をつくってお念仏の数を数えるようにと指導されたといわれます。中国で初めて念珠を用いられたのは、

道綽禪師だそうです。

道綽禪師の晩年のお弟子さんに、このあと次回に登場する七高僧のお一人、第五祖の善導大師がおられました。貞観 15 年（641 年）、善導大師は 80 歳の道綽禪師を訪ねて師事され、道綽禪師は亡くなるまで『観無量寿経』などの教えを授けました。曇鸞大師と道綽禪師は直接お会いしたわけではありませんが、道綽禪師と善導大師は「面授」の師弟でした。

道綽禪師は、唐代の太宗 貞観<sup>たいそうじょうがん</sup> 19 年（645 年）4 月に 84 歳で、玄中寺で亡くなりました。日本では大化の改新の年です。

道綽禪師の主な著書には『安楽集』上下二巻があります。これは『仏説観無量寿経』の解釈書に当たります。

『正信偈』4 頁目 下段 5 行目～

どうしゃくけっしょうどうなんしょう ゆいみょうじょうどかつうにゆう  
「道綽決聖道難証 唯明浄土可通入」

どうしゃく しょうどう しょう けつ じょうど つうにゆう  
〈道綽は聖道の証しがたきことを決し、ただ浄土の通入すべきことをあかす。〉

どうしゃくぜんじ しょうどうもん おし むすか じょうどもん おし  
《道綽禪師は、聖道門の教えによってさとり（証）のは難しく、ただ浄土門の教えによってのみ  
さとりに至ることができる（通入）ことを明らかにされました。》

七高僧の第一祖である龍樹菩薩は、仏教全体を「難行道・易行道」に分けて示され、苦しい陸路の旅である難行道ではなく、楽しい水路の船旅である易行道、すなわち阿弥陀仏の名号を信じて称えることを勧められました。第三祖の曇鸞大師は、仏教を「自力・他力」に分け、浄土に生まれて仏になることも迷いの世界に還って人々を救うこと（往還二回向）も、みな阿弥陀仏のはたらき、すなわち他力によると説かれました。

今回の第四祖・道綽禪師は仏教を「聖道門・浄土門」に分けて、末法の世では聖道門の教えによってさとりのは難しく、浄土門の教えによるのみであると示されたのです。

「聖道」という言葉は本来「聖（仏のさとり）に至る道」という意味で仏道のことですが、「浄土門」に対する「聖道門」という場合は、みずからの力で学問を修めて、自力の長く厳しい修行によって、この世でさとりを開く道です。しかし末法の時代では、その聖道門の教えによってさとりのは難しいというのです。それは、お釈迦様が入滅されてから時代を経た末法の世であることと、聖道門の教えは奥深いけれど、末法の人々の能力ではそれを理解することができないからだ、『大集月蔵経』に説かれているからなのです。

親鸞聖人も比叡山で修行されていた時に、自力による修行では救われないことを、身をもって体験されました。だからこそ、七高僧がたがお伝えくださった「浄土往生」の教えがありがたく尊いものだ

と思われたのでしょうか。

道綽禅師は、著書の『安樂集』で、ただ、浄土門の教えによってのみさとりに至ることができることを明らかに示されたのです。

**「万善自力貶勤修 円満徳号勸専称」**

〈万善の自力、勤修を貶し、円満の徳号、専称をすすむ。〉

《多くの善根（万善）を積む自力の修行をしりぞけられて、あらゆる功德を円満にそなえた名号

（南無阿弥陀仏のお念仏）をひとすじに称えることを勧められました。》

「万善の自力」というのは、念仏以外の自力で行ずる諸善万行のことで、聖道門のことです。末法の時代にはふさわしくないで、しりぞけられたのです。

「円満の徳号」は、功德の円満した本願他力の名号のことで、もっぱら南無阿弥陀仏を称えることを勧められたのです。

**「三不三信誨慇懃 像末法滅同悲引」**

〈三不・三信のおしえ慇懃にして、像・末・法滅おなじく悲引す。〉

《三不信と三信の教え（誨）を懇切に示し（慇懃）、正法・像法・末法・法滅、いつの時代において

も、本願念仏の法は変わらず人々を救い続ける（悲引、悲＝仏の大慈悲）ことを明かされました。》

「慇懃」は呉音読みで、漢音では「いんぎん」となり、これはねんごろなこと、ていねいなことです。

「三不信」は、曇鸞大師の『往生論註』に説かれています。阿弥陀如来のお心を疑い、素直に聞くことができず、相続した信心とならないことで、次の三つです。

- ① **不淳心**…淳くない心、信心が深くない、純粹でない心、あるようなないような、影の薄い曖昧な信心
- ② **不一心**…このこと一つと決定しない、あれもこれもとぶれる心、阿弥陀一仏にまかせきっていない心
- ③ **不相続心**…持続しない、断続的でしかない、一貫性がない心

の三つのことです。

これらは自力が無効であることの懺悔であるとともに、弥陀にまだ救われていない時に起る心とされ

ました。そしてその対極にある天親菩薩の『浄土論』冒頭の「我一心」こそが、如来回向の眞実信心であることを明らかにするためでした。

「三信」とは、道綽禪師の『安楽集』に説かれた「三不信」の対極に当たる、他力の信心のことです。

① 淳心…純粋で混じり物がない心

② 一心…ふたごころがなくで散乱することのない心。決定して疑いのない心

③ 相續心…一貫して持続する心。自力の思いをまじえず、ただ阿弥陀仏の救いを念ずる信心が相續すること

の三つで、「三不信」の対極に当たります。

曇鸞大師が示された「三不信」を受け、道綽禪師は『安楽集』の中で「三信」を説いて、他力眞実の信心を示されました。

「像末法滅」とは、像法・末法・法滅つまりいつの時代でも、という意味で、念仏の教えはつねに私たちを導いてくださる（悲引、悲=仏の大慈悲）ことを明らかにされたのです。道綽禪師の教えには、仏教の時代観である「三時思想」が強く影響しているのです。

### 「一生造悪値弘誓 至安養界証妙果」

〈「一生悪をつくれども弘誓に値いぬれば、安養界に至りて妙果を証せしむ」といへり。〉

《「たとえ一生涯、悪をつくり続けても、阿弥陀仏の本願(弘誓)を信じれば、阿弥陀仏の浄土(安養界)

に往生して、この上ないさとりを開く」と述べられました。》

これは、道綽禪師が書かれた『安楽集』上巻（意識）の

「大経に説かれる。「もし衆生があつて、たとい一生の間、悪を造つても、臨終において、わが名を称えて十念相續するものが、もし往生しないならば、正覚をとるまい」と。」

という言葉に依つたものです。

末法の時代、五濁悪世の世に生まれて、一生涯にわたつて悪を造つていく私達衆生は、阿弥陀仏の第十八願に依らなくては救われないのです。

道綽禪師は、仏道には聖道・浄土の二門があることをあきらかにして、阿弥陀如来の浄土に生まれる道をすすめられたというのが、道綽禪師の一番の功績といえるでしょう。

龍樹菩薩は「難行」に対して「易行」、曇鸞大師は「自力」に対して「他力」、そして道綽禪師は「聖道門」に対して「浄土門」を立てられました。末法の時代にあつては、自力の難行をたのみとする聖道門ではさとりは開けず、他力易行の念仏による以外に救われる道はない、とされたのが、道綽禪師だったのでした。